

大 阪 藝 文 研 究

混 沌

第 三 十 九 号

混 沌 會

守口文庫所蔵「明治十八年洪水碑記念扇子」について

片山 正彦
新稲 法子

はじめに

本稿は、財団法人守口文庫（大阪府守口市、以下「守口文庫」と略す）が所蔵する、明治十八年洪水碑建立を記念して作成された扇子「明治十八年洪水碑記念扇子」について、述べるものである。

片山が勤務する市立枚方宿鍵屋資料館（大阪府枚方市、以下「鍵屋資料館」と略す）では、平成二十六年（二〇一四）十月八日より十一月二十四日まで、市立枚方宿鍵屋資料館・淀川資料館合同企画展「明治十八年の淀川洪水」を開催した。淀川流域に甚大な被害をもたらした明治十八年（一八八五）六月から七月にかけての洪水（通称「伊加賀切れ」）は、三矢村・伊加賀村（現大阪府枚方市）の淀川堤防を決壊させ、北河内・中河内一帯が水没、水

害は大阪市中に及んだともいわれている。この約一年後の明治十九年九月、洪水の悲惨さを風化させないように、「明治十八年洪水碑」が建立されることとなり、十一月には建碑式が執り行われた。この際に建立を記念した扇子が作成され、守口文庫が所蔵していること、加えて扇子の版木も現存することが合同企画展における調査の過程で明らかとなった。

詳しくは後述するが、「明治十八年洪水碑」の建立を記念した扇子「明治十八年洪水碑記念扇子」の扇面には、建立された洪水碑が描かれるとともに、漢詩も記されている。この漢詩については、大野正義編集「絵本榎並八箇洪水記」（発行同、二〇一五年）において紹介されている。また片山も、合同企画展では明治十八年淀川洪水関連資料として、この扇子を展示することとしたが、いずれも簡単なものであった。

そこで、新稲法子が新たにこの扇面両面を翻刻し訓読したのが第一章である。また第二章では、紙幅も限られていることから、合同企画展「明治十八年の淀川洪水」における調査過程で明らかとなったことを片山が簡単に述べておきたい。

（片山）

一 「明治十八年洪水碑記念扇子」翻刻と訓読
本章では、明治十八年洪水碑記念扇子を翻刻、訓読し、適宜語注を施した。

一 翻刻は原則として旧字体、訓読では常用漢字は通行の字体を用いた。

一 碑文の翻刻は「」で改行を表し、訓読は新たに段落を分けた。

一 訓読は歴史的仮名遣いを用いた。

（扇面オモテ）

【翻刻・訓読】

懷襄害去淀堤新	懷襄の害去り淀堤新たなり
碑記成功仰至仁	碑は成功を記し至仁を仰ぐ
今日盡歡聲若沸	今日歡を尽くし声沸くが若し
醉歌皞皞是堯民	醉歌皞々是れ堯民

南岳

【注】

七言絶句、韻は新・仁・民（上平声十一真、平水韻）。

○懷襄 山やおかに達するほどの洪水。「尚書」堯典に「洪水滔天、浩浩懷山襄陵、下民昏墊。」とある。○成功 碑ができあがったこと。碑文に「其成功俊速如此者……」とある。○至仁 仁の至り。山口県に巡行していた明治天皇に代わって親王北白川宮が洪水の現場に行啓したことをいう。碑文には「会軍駕巡幸山口県、乃詔親王北白川宮代巡撫民隱。」とあり、碑の右側には「二品北白川能久親王殿下 以盛翰大阪府知事從五位建野郷三謹書」とある。○皞皞 恵みを受けて満ち足りているさま。「孟子」尽心に「王者之民、皞皞如也。」とある。○堯民 堯の時代の民。鼓腹撃壤の故事で知られるように、理想的な天子の下で平和を楽しむ人々。

作者「南岳」は泊園書院の藤澤南岳である。以下、関西大学東西学術研究所泊園書院のサイトから略伝を引用しよう。

藤澤南岳（1842-1920）

東叅の長子。天保13年（1842）生まれ。名は恒、通称は恒太郎、字は君成。号は南岳のほか七香齋、香翁、

醒狂子、九々山人など。慶応元年（1865）、24歳で家督を継ぎ高松藩の儒官となる。慶応4年（1868）、藩論を佐幕から勤皇へと劇的に転換させ、藩滅亡の危機を救う。その功により藩主から南岳の号を賜わった。その後、明治新政府からの出仕要請を断り、明治6年（1873）、32歳の時、泊園書院を大阪船場に再興する。のち、淡路町一丁目に書院を移す。

南岳は当代随一の学匠として名声高く、全国から学生が雲集し、泊園書院の黄金期を作った。管絃に接した門人は五千人といわれ、交友の範囲も学界や教育界のみならず、政界や実業界に広がり、大阪を代表する文化人として活躍した。逍遙遊社における漢詩文の集いや、孔子を祭る釈奠も始めている。著述はきわめて多く、公刊された主な著作として「自警蒙求」、「増補蘇批孟子」、「校訂史記評林」、「修身新語」、「評釈韓非子全書」、「論語彙纂」、「万国通議」、「七香齋文舊」、「七香齋詩抄」がある。このほか、未公刊の自筆稿本は膨大な量にのぼる。（注1）

藤澤南岳の詩集「七香齋詩抄」（注2）にはこの七言絶句が収録されていない。泊園文庫所蔵の南岳の詩稿、

七香齋吟草六冊二帙・詩文稿四冊一帙・七香齋吟草十七冊三帙・七香齋吟稿八冊三帙（注3）を確認したが、この詩を見出すことはできなかった。
画史は未詳。

（扇面ウラ）

【翻刻】

澱河洪水碑銘

維歲明治乙酉夏六月霖雨彌一月澱河暴漲堤防大崩漂沒攝一河諸郡三百三十七村下民昏墊人畜死亡流失盧舍者二千九十餘戸府知事建野氏聞事急先遣大書記官遠藤氏率其僚屬拮据經營疏鑿水道尋躬親臨之計畫工事時土木局長三嶋通庸與四等技師田邊義三郎亦臨之協議戮力修理堤防粗就條緒會車駕巡幸山口縣乃詔親王北白川宮代巡撫民隱於是官吏與役徒踊躍奮勵手額相慶曰是官家之恩也諸員之力也安可不記其所自傳之不朽乎哉乃條記其實一日潰決河内國茨田郡三矢村沿河堤防係于京攝官道者潰決凡二次前者則七十餘間後者則六十間強合前後百二十間餘二曰水壘六月十七日水量加一

丈四」尺八寸其七月一日則一丈三」尺八寸三日修築起工于七月十二日其八月三十日竣工中」間僅四十餘日耳其成功俊速」如此者巡視之備至與役徒」勉之所致也而其係于新築者」二百十九間餘而用土豚木石」者都十餘萬四日工徒用人者」十五萬二千六百三十人五日」工費費金者四萬九千三百十」二圓四十三泉嗚呼其竭人力」之巨費工費之大皆河水暴漲」所根據繇是觀之其傷害人民」流亡家屋水反有甚於火者也」故鄭子產有言曰火烈而水弱」烈者民望而畏之故鮮死焉弱」者狎而玩之則多死焉其有以」也吾知稱此舉曰古之遺愛亦」無愧因爲之銘曰」

火之性可畏 可畏者幸身
水之性可狎 可狎者害人
克覺斯理者 可治水治民
不朽銘偉績 遺愛傳千春

明治十九年丙戌九月

平安 菊池純撰文

讚岐 大西建謹書

【訓読】

澱河洪水碑銘

維れ歲明治乙酉夏六月、霖雨月を弥り、澱河暴漲し、堤

防大いに崩れ漂没す。摂河の諸郡三百三十七村、下民は昏墊し、人畜は死亡す。流失せし盧舍は二千九十余戸なり。

府知事建野氏、事の急なるを聞き、先ず大書記官遠藤氏を遣はし、其の僚属を率いて、拮据經營し、水道を疎鑿せしむ。躬を尋いで親しく之に臨み、計画工事す。時に土木局長三嶋通庸と四等技師田邊義三郎と、亦た之に臨み、協議戮力して、堤防を修理し、粗條緒に就く。

車駕山口県を巡幸す。乃ち親王北白川宮を詔し、代りて民隱を巡撫せしむ。是に於いて官吏と役徒と踊躍奮勵し、手額相慶して曰く、是れ官家の恩なり、諸員の力なり、安んぞ其の自ら伝うる所の不朽を記せざるべけんやと。乃ち其の實を條記す。

一に曰く、潰決。河内國茨田郡三矢村沿河の堤防、京摂官道に係る者、潰決すること凡そ二次、前者は則ち七十余間、後者は則ち六十間強、前後合せて百二十間余なり。

二に曰く、水量。六月十七日、水量加わること一丈四尺八寸、其れ七月一日は則ち一丈三尺八寸なり。

三に曰く、修築。七月十二日に起工し、其の八月三十日

に竣工す。中間僅かに四十余日のみ。其の成功の俊速たる此の如きは、巡視の備至と役徒黽勉の致す所なり。而して其の新築に係る者二百十九間余にして、土豚木石を用うる者、都て十余万なり。

四に曰く、工徒。用人は十五万二千六百三十人。五に曰く、工費。費金は四万九千三百十二円四十三泉。嗚呼、其の人力を竭くすことの巨にして、工費を費やすことの大なる、皆な河水暴漲の根據する所なり。是れに縁りて之を観るに、其の人民を傷害し家屋を流亡せしむること、水反つて火よりも甚だしき者有るなり。故に鄭の子産、言有りて曰く、火は烈にして水は弱なり。烈なる者は民望みて之を畏る。故に死するもの鮮なし。弱き者は狎れて之を厭ふ。則ち死するもの多しと。其れ以有るなり。吾れ此の拳を知り称して曰く、古の遺愛亦た愧づること無しと。因りて之が為に銘して曰く、
火の性畏る可し 畏る者は身を幸いす可し
水の性狎る可し 狎る者は人を害す可し
克く斯の理を覚ゆる者 水を治め民を治む可し
不朽 偉績を銘し 遺愛 千春に伝ふ
と。

○其有以也 道理だ。以は道理。「詩経」邶風・鹿丘に「何其久也 必有以也（何ぞ其れ久しきや 必らず以有らん）」とある。

菊池純は菊池三溪。三溪の伝記については、主に富村登、日野龍夫両氏の記述を元に小林勇氏が「菊池三溪と『西京伝新記』」の一節「菊池三溪略伝」（注4）にまとめ、福井辰彦氏の「京都大学附属図書館蔵 菊池三溪自筆稿本目録（一）」（注5）の序にも記載がある。今これらによって簡単に記すと、三溪は紀伊の人、文政二年（一八一九）生まれ。名は純、字は子頭、三溪は号。別号に晴雪楼主人など。江戸に出て林稗宇の門に学び、和歌山藩江戸藩邸の藩儒になり、安政五年には十四代将軍家茂の將軍侍講となった。慶応二年に家茂が没すると職を辞し、下総国結城郡宗道村に退隠、常総各地を転々として民間に帷を垂れ、維新後はいくつかの藩の藩儒として聘せられた。明治四年に東京、六年に京都に移り、市内を転々としながら十四年まで滞在する。明治十四年に東京に戻って警視庁御用掛を勤め、十六年には大阪で大阪府中学一等教諭となる。その後遅くとも明治二十一年には京都に戻り、

明治十九年丙戌九月

平安 菊池純撰文
讃岐 大西建謹書

【注】
○漂没 水に漂いながら沈んでいくこと。「明史」何孟春伝「江淮北河水大溢、漂没田廬人畜無算。」○下民人々。「尚書」堯典「洪水滔天、浩浩懷山襄陵、下民昏墊。」○昏墊 溺れること。○虛舍 住宅。○建野氏 建野郷三。○遠藤氏 遠藤達。○拮据 鳥が巣を作るように忙しく働くさま。○疎鑿 土地を切り拓いて川の道を通すこと。○三島通庸 栃木県令と兼任で明治十七年に内務省土木局長。○田辺義三郎 内務省技師。○親王北白川宮 北白川宮能久親王。明治天皇の義理の叔父に当たる。○民隠 人々の苦痛。○手額 額に手を遣る。目出度いことを喜ぶ仕事の漢文的表現。○電勉 懸命に働くこと。「詩経」邶風・谷風に「電勉同心」とある。○鄭子産 春秋時代鄭の政治家、子産のこと。○火烈而水弱……蘇軾「統養生論」に「鄭子産曰、火烈、人望而畏之。水弱、人狎而玩之。」とある。

明治二十四年（一八九二）没、享年七十三。終焉の地は富村氏によると若狭國小浜だという。著書に「晴雪楼詩鈔」「東京写真鏡」「西京伝新記」「本朝虞初新誌」「訳準綺語」など。

三溪は明治十六年から大阪府中学一等教諭を務めており、自身も被災した。この碑文の末尾には「平安 菊池純」と記しているが、三溪は大阪にいた間もこのように署名することが多かった（注6）。桜ノ宮にも別の明治十八年洪水碑が現存するが、その碑文も三溪によるものである。「晴雪楼遺稿」（注7）に四種ある草稿では、二種に「平安 菊池純」、もう二種に「大阪府中学校一等教諭 菊池純」と署名している。京都大学附属図書館蔵の写本「襄陵集」（注8）の序には「予亦罹災者。乃喪其所獲之詩。名曰襄陵集（予も亦た災を罹りし者なり。乃ち其の獲る所の詩を喪め、名づけて襄陵集と曰ふ）」とあり、「是歳七月。移居于道修坊（是れ歳七月、道修坊に移居す）」という割注がある。七月には道修町に住んでいたのである。同書に収められている「洪水紀事十首」其四には「没我林園漂我廬 欲將性命饒江魚」と被災の様子が生々し

く詠まれている。

この碑文は管見では刊本には見いだせなかった。「明治碑文集」(注9)には三溪の「撰河泉洪水記念碑」が収められているが、これは桜ノ宮神社にある碑のものである。

京都大学附属図書館蔵の「三溪遺稿」(注10)には「明治十八年澁河洪水記念碑銘」(明治十八年澁河洪水碑銘)と題するこの碑文の草稿三種が収められている。そのうち二種には朱批が付されており、その一つは五十川惣堂によるものである。

四條畷村第九代村長山口米太郎が若き日に記した明治十八年水害の体験記、「山口米太郎文書」(注11)には、建碑式についても詳細に記録されており、この碑文も書き留められている。

扇面で三溪のこの文を記した讃岐の人、大西建については未詳。

版木に記された田中団扇堂については、「大阪繁昌誌」上巻に「扇子は北浜の團扇堂、心斎橋筋の三の輪」とある(注12)。

(新稲)

二 合同企画展における調査概要

明治十八年の淀川洪水の様子や災害復興に関する資料を展示した、市立枚方宿鍵屋資料館・淀川資料館合同企画展「明治十八年の淀川洪水」は、平成二十六年四月、現存する「明治十八年洪水碑」(画像1)、ただし現存する洪水碑の「年」の字は、その古字または本字である「季」が用いられている)が枚方市登録文化財となったことに合わせて、開催するに至った。ここで片山は、明治十八年洪水に関連する資料の調査・収集にあたることとなったが、以前から鍵屋資料館での展示に協力していた、守口文庫理事長の菊田芳氏より、明治十八年洪水に関連する扇子を所有しているとの話を聞いており、実際に扇子の調査を守口文庫で行うこととした。

「明治十八年洪水記念扇子」(画像2)は、明治十九年十一月二日付「朝日新聞」(朝日新聞記事集成)(枚方市史編集委員会、一九八三年)第一・二集、二九三洪水記念碑の建碑式 明一九・一一・二二に「河内国茨田郡枚方堤防の洪水記念碑建碑式は明三日執行の筈なりしかども、都合に依り更に来る七日執行する事となり、同

(片山)

日は同処に於て煙花(はなび)・煎茶・抹茶・模擬扇子店・背画席・角力等の催あり。建碑発金者菊田保太郎・霞崎楢二・野口守敏・赤井伊重郎・西村植蔵・西村吉三郎・木南仙三郎の諸氏が弊社へ招状を贈られる」とあり、明治十八年洪水の翌年の十九年十一月、「明治十八年洪水碑」の建碑式が執り行われ、その際に「模擬扇子店」が出店されていたことが記されている。ここから、建碑式に合わせて扇子が頒布されたのではないかと考えることができる。

また記事にもみえる「建碑発金者菊田保太郎」は、守口文庫理事長菊田芳氏の血縁であり、扇子を所有しているだけでなく、扇子を作成する際に使用された版木二点も所有していることがわかった。扇面オモテの版木(画像3)は、両面に洪水碑を中心に、当時の淀川や枚方の様子が彫刻される。両面にのこる墨の濃淡と実際の記念扇子の色合いから、二色刷りであったことがわかる。扇面ウラの版木(画像4)には、「明治十八年洪水碑」裏面の碑文とほぼ同内容のものが彫られている。

この調査のうち、「明治十八年洪水記念扇子」とその版木二点は、合同企画展にて公開されることとなった。

おわりに

扇面オモテの漢詩やウラの文の訓読と解説については、第一章に示したとおりであるので、ここでは最後に、扇面オモテに描かれた淀川と洪水碑についての説明をしておきたい。

前述したように、扇子そのものは、明治十八年洪水の翌年の十九年十一月、「明治十八年洪水碑」の建碑式が執り行われた際に頒布されたので、扇面に描かれる淀川やその沿岸の様子は明治十九年当時のものであると考えられる。岬状の突き出したあたりに「明治十八年洪水碑」が描かれるが、現存する「明治十八年洪水碑」の設置箇所とは異なっている(画像5)〔画像6〕〔画像7〕。明治十九年に建立された洪水碑は、周辺地域の開発等により数度の移転を繰り返していることが知られており、扇面オモテに描かれた「明治十八年洪水碑」は、当初の設置箇所を伝える貴重な歴史資料の一つであるといえる。当初に設置されていたのは、現在の枚方大橋南詰東

側付近であると推定される(画像8)。

また、洪水碑が立地する岬状になっている箇所(画像5)は、明治十八年六月の洪水時に決壊した淀川堤防の残存部分と思われる。湾状になった箇所を囲むように、弓形の仮堤防が築かれた様子もうかがえる。この後、堤防決壊箇所は修復され、湾状になった箇所は埋め立てられ、部分的に池として残ったことが他の関連資料によって確認できる(画像7)(画像8)。現在では、池は埋め立てられ、存在しない。

(片山)

注1 泊園書院の歩み「三世四代」の院主と石濱純太郎
<http://www.dbl.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/syoin/enkaku01.html> 表記を一部改めた。

注2 藤澤南岳「七香齋詩抄」大正七年(一九一八)、
国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる。

注3 藤澤南岳「七香齋吟草」、同「詩文稿」、同「七香齋吟草」、同「七香齋吟稿」、すべて関西大学附属図書館蔵。

注4 小林勇「菊池三溪と『西京伝新記』」(新日本古

典文学大系明治編1開化風俗誌集」二〇〇四年)

注5 福井辰彦「京都大学附属図書館蔵 菊池三溪自筆稿本目録(一)」(『京都大学國文學論叢』24巻 二〇一〇年)、福井辰彦編「京都大学附属図書館蔵 菊池三溪自筆稿本目録」京都大学附属図書館、二〇一二年

注6 日野龍夫「菊池三溪自筆詩文稿」(『国語国文』46巻 一九七七年、「日野龍夫著作集第三卷近世文学史」ペリカン社二〇〇五年)に「大阪にいた間も『平安菊池純』と署名することが多いから、京都を帰るべき土地と定めていたのであろう」とある。

注7 菊池三溪「三溪遺稿」京都大学附属図書館蔵

注8 菊池三溪「八百八橋春水来集・襄陵集」京都大学附属図書館蔵

注9 佐藤平次郎「明治碑文集」明治二十四年刊、国文学研究資料館近代書誌データベースによる。

注10 菊池三溪「晴雪楼遺稿」京都大学附属図書館蔵

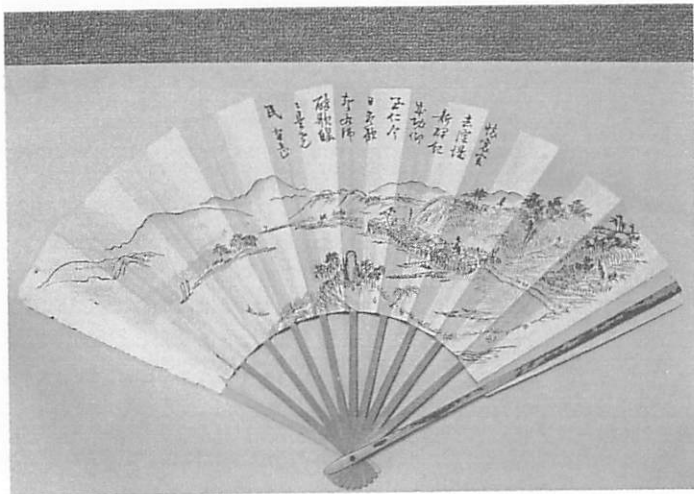
注11 四条畷市教育委員会編纂「四條畷市史第三卷(史料Ⅱ)一九八三年 所収

注12 宇田川文海・長谷川金治郎編「大阪繁昌誌」明治

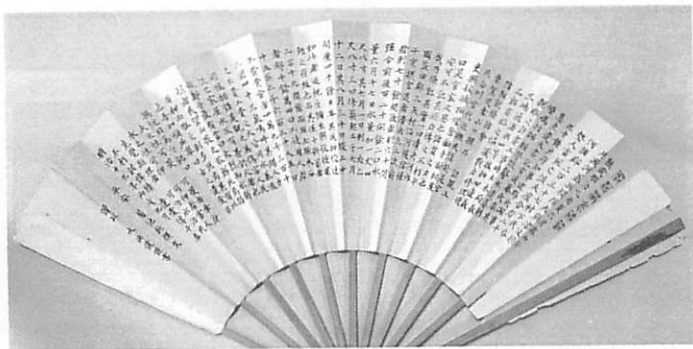
三十一年

貴重な資料の閲覧を許可して頂いた各所蔵機関、並びに菊池三溪の稿本についてご教示を賜りました福井辰彦氏に記して御礼申し上げます。

【画像2】「明治十八年洪水碑記念扇子」(守口文庫、明治19年(1886))扇面オモテ



【画像2】「明治十八年洪水碑記念扇子」扇面ウラ

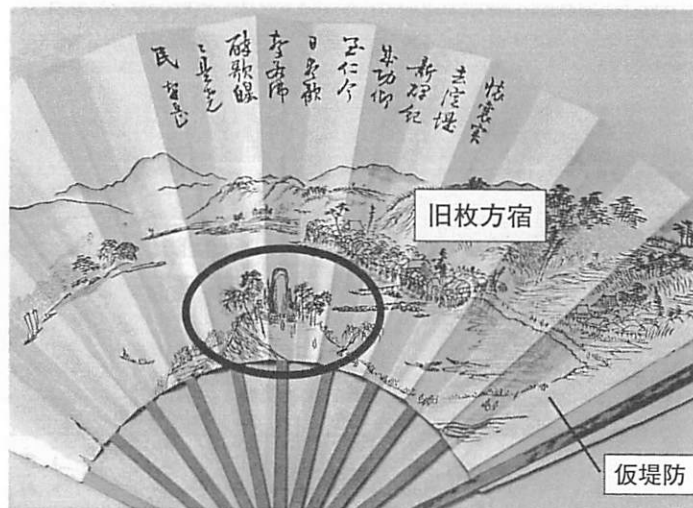


〔「明治十八年洪水碑記念扇子」について〕

【画像1】現在の「明治十八年洪水碑」(平成26年(2014)2月撮影)



【画像5】「明治十八年洪水碑記念扇子」扇面オモテを加工



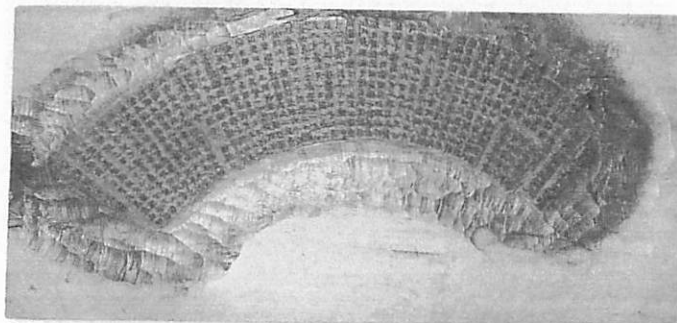
【画像6】「仮製地形図」(明治21年(1888)測量、明治26年製版、国土地理院(旧陸地測量部))を加工



【画像3】「明治十八年洪水碑記念扇子版木」(守口文庫、明治19年(1886))扇面オモテ



【画像4】「明治十八年洪水碑記念扇子版木」(守口文庫、明治19年(1886))扇面ウラ



今号も皆様との機縁により、新たに
 混沌会にご参会いただいた方、資料
 の紹介にご協同いただいた方も含め
 多彩な内容にて刊行できましたこと
 感謝いたします。次号は節目の教と
 なる四十号に達しますが、『混沌』
 が長く続きますよう、ご助力お願い
 申し上げます。

(鴛原)

平成二十八年二月十六日発行

編集 混沌会

発行 中尾松泉堂書店

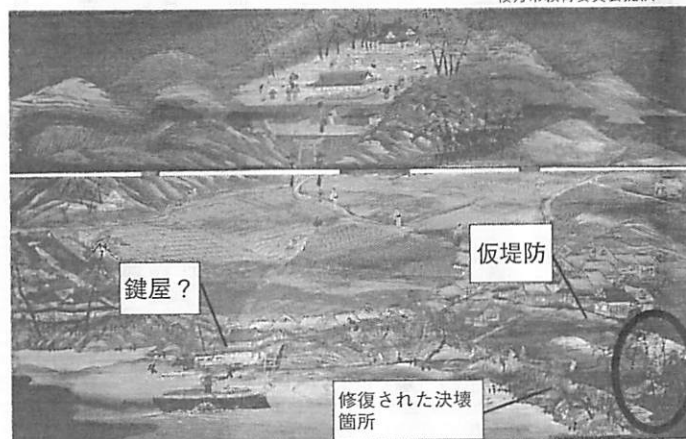
〒541-0047 大阪市中央区淡路町三十四ー四

電話 〇六一六二三一八七九七

振替口座 大阪 三三三六

ISSN 2188-0263

【画像7】「意賀美神社奉納絵馬」（鍵屋資料館、明治34年（1901）10月）を加工
 枚方市教育委員会提供



【画像8】「淀川改良三島・北河内両郡買収地図」（淀川河川事務所提供、明治後期ごろ）を加工

